



写真5 生物部に所属する市内高校生

また、ヒグマの頭部は、高校生3名が皮を剥ぐ作業から行いました(写真5)。

終了後のアンケートでは、標本作製の過程を実際に体験できて楽しかったなど、非常に多くの好評を得ました(表1)。幼児が1名、会場の臭いが耐えられず、途中辞退となりましたが、その他は、体験前は気持ちが悪いと不安に思っていた方も、やってみると意外に楽しかったという感想をいただきました。

表1. ワークショップ参加者の感想と要望

アンケートの内容
<b>【幼児】</b>
・楽しかったよ
<b>【高校生】</b>
・動物の頭の構造を知れたのですごく勉強になった
・すごい臭いがしたけど、標本作りが初めてでとても面白かった
・すごく楽しかったし、頭の筋肉っておもしろいなあと思った
<b>【一般成人】</b>
・動物の皮の剥ぎ方を覚えたいです
・意外に楽しかったです
・剥製作りや植物のDNAを調べたりしたいです
・気持ち悪いこともなかったし、面白かったし、良い体験ができた
・臭いも気にならず夢中でできた。やってみるのが一番だと思った
・作製を最初から最後まで体験したかった
・楽しかったです!
・楽しかった。今後も機会があればやりたい
・勉強になった。
・とにかく凄く勉強になった!おもしろかった
・もう少し広い部屋で、換気扇などがあればいいのですが...
・新鮮な体験でした。ありがとうございます
・子ども連れもいていい雰囲気ですね
・伊達でこの企画をやっていることに驚きました
・完成まで月1回くらいの企画だと面白いかと思う
・学生含めて年間通してできるといいですね
・大型のエゾシカやヒグマをみんなで完成までできるといいですね
・始めて見る光景ばかりで、とても刺激的でした!楽しかった

また、9割以上の方が、今後も標本作製の機会があればボランティアとして協力していいという回答があり、これまで研究所の活動に参加していなかった市民を自然分野の事業を実施していくことで、

もっと街の文化事業に取り込めることが分かりました。「作製を最初から最後まで体験したかった」「全身骨格の作製や鳥類の仮剥製の講座を完成まで月1くらいの企画で実施してほしい」との熱い意見も多く、予想以上に解剖や標本作製に関心のある方が多いことが分かりました。

このワークショップを通じて、地域の自然史資料の収集の意義を市民に普及し、広く関心をもってもらうことで、市民と行政の自然に関する情報ネットワークを構築するねらいもありましたが、達成の第一歩として成功しました。

#### 4. みんなで残そう! 地域の自然史記録

研究所では史跡北黄金貝塚公園と伊達市開拓記念館の庭園を主なフィールドとして、自然分野のボランティアが毎年、色々な活動を展開しています(前者は、縄文スクスク森づくりの会、後者は、だて記念館びおとーぷクラブ)。主な活動内容は、植樹やビオトープづくりですが、これ以外に野外での自然観察会や勉強会を開催するなど、年間を通して多様な活動を行っています。こうした会員の中には、専門的な知識や資格を持った専門家が沢山おり、2004年から年5回開催している冬の自然勉強会では、これまでに、植物、昆虫、動物、鳥類など、幅広いジャンルでの講演を実施してきました。今後は、こうした市民の知識や技術をもっと街づくりに活かしてもらえるように、研究所では様々な博物館ソフト事業の開発をしていきたいと思えます。

また、今回ワークショップで使用した動物の死体の多くは、市の環境衛生課から提供された有害駆除の個体を用いました。近年、道内ではエゾシカやアライグマによる農業被害や生態系への影響が深刻化していますが、伊達市でも毎年多くの鳥獣被害が発生し(図1)、特にアライグマによる被害は増加傾向にあります。

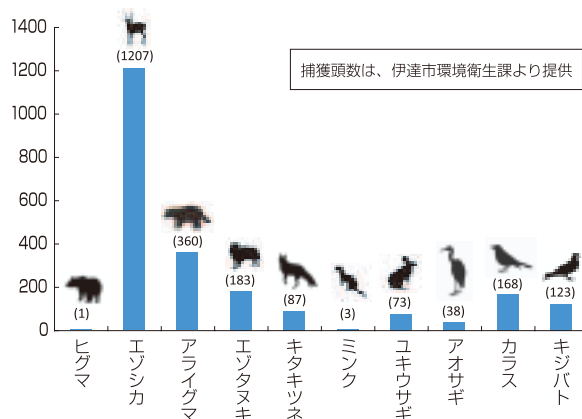


図1. 平成21年度～平成23年度に伊達市内で有害駆除等により捕獲された鳥獣の3カ年累計頭数

動物の死体は、標本として活用したり、食害など鳥獣被害の実態を把握する上でも有用な情報をもたらすにもかかわらず、殺処分された死体の多くは、ゴミとして捨てられている現状にあるのです。

今後は、動物の死体を、博物館や学校教育の現場で有効活用できる体制を作っていかなければならないと考えています。また、地域で起きている鳥獣被害について、博物館などで現状を正しく伝えていくことは、将来的には、市内で深刻化する農業被害などの野生動物問題を減らすことにもつながると考えています。

地域住民が動物の死体を収集し、博物館標本として作製から保管までの過程を行っている先駆的な事例として、「なにわホネホネ団」があります。なにわホネホネ団は、大阪市立自然史博物館を拠点に活動する市民サークルで、小学生から60代までの百十数名の団員が活動し、作製だけでなく、博物館に動物死体を集める意義についても啓発を行っています。このため、なにわホネホネ団の活動を見た団員以外の市民が動物死体を発見した場合、博物館に提供するといった意識が広がり、全国的に注目されています。

今回のワークショップを継続して実施することで、伊達においても、市民が地域の自然情報を残している下地を作っていきたいと考えています。

どの地域でも言えることですが、地元の人は、その土地固有の自然や文化を当たり前のものでしてそ

の価値や魅力に気付いていないことがあります。

例えば、昨年度から、北海道では珍しい柿の実を用いた「柿渋プロジェクト」がスタートしましたが、子どもの頃から街中で普通に見ることのできる伊達の柿は、金銭的価値のないものだと地元の人々は考えがちなのです。

自然についても同様で、噴火湾周辺は自然の宝庫です。より多くの市民に地域の自然に関心を持ってもらうことは、将来的には市民が地域の自然を守り、地域資源を活かした街づくりにもつながるものと考えています。市民と一緒に地域の自然を未来に残し、地域の資源として活かしていける道を模索していきたいと思います。

#### 【謝辞】

ワークショップ開催にあたり、ご参加頂いた皆様及び冬の自然勉強会実行委員会の方々にご協力とご支援を頂きました。また、資料の提供には、オオヤミート様にご協力をいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

#### 【参考文献】

佐久間 大輔, 2011『博物館と生態学 (17)』

自然史系資料の文化的価値—標本を維持し保全する理由—, 日本生態学会誌, 61:349–353

大阪市立自然史博物館編著, 2007『標本の作り方』

自然を記録に残そう, 東海大学出版会

## 『伊達の自然』 コラム①

### 善光寺自然公園におけるエゾタヌキの糞内容物

伊達市噴火湾文化研究所 学芸員 羽馬 千恵

2012年3月に善光寺自然公園でエゾタヌキの「ため糞」を見つけました。ため糞とは、1カ所にまとめて糞をするタヌキの習性です。いわば、タヌキ同士の「共同トイレ」で、個体間の情報交換の場であるともいわれていますが、その生態はよく分かっていません。動物の暮らしを知る上で、何を食べているかを明らかにすることは基本の一つですが、日本のように森林に生息し、夜行性である動物の食事風景はめったにお目にかかれません。そこで、直接観察が難しい場合、糞や胃の中身から間接的に調べる方法がいくつかあります。ちょっと汚い話ですが、ウンコの中に残された未消化物をメッシュ上で水洗いして調べるのです。善光寺のため糞場から、いくつか糞塊を持ち帰り、残渣を調べてみました。出てきたものは、ヤマブドウの種、甲虫の外骨格、哺乳類の骨などです。タヌキは雑食性で嗜好性がないため、特に何かを選択して食べているわけではありません。糞の中身から、善光寺自然公園で、一生懸命に餌を探して拾い食いしている姿が思い浮かびます。



善光寺自然公園のエゾタヌキのため糞

ぶんぶん茶釜などの昔話やスタジオジブリの映画『平成たぬき合戦ぼんぼこ』からも分かるように、タヌキは昔から人里近くに暮らす身近な野生動物です。しかし、北海道の人にとってはあまり馴染みがないようで、よく「キツネは見るけどタヌキは北海道にいるの?」と訊かれます。日本には、津軽海峡を境に北海道にエゾタヌキ、本州以南（南西諸島は除く）にホンダタヌキの2亜種がいて、北海道では山や里山に生息が確認されています。伊達市でも、善光寺自然公園のような身近な場所に、こっそりと暮らしているのですよ。